

にいがた

北から南から



地域の歴史にふれて

小東 由男

2014年度から「平和のための戦争展」のパネル作成に参加しています。私の担当テーマは、14年度「多国籍企業が支える『戦争のできる国』づくり」、15年度「明治〜昭和20年間」の戦争の実相、16年度「教科書検定制度と教科書内容の反動化を許さない闘い」、17年度「南京大虐殺を引き起こした日本の中国侵略の実相」、18年度『石山村報』から見た「銃後の護り」〜国民精神総動員の展開〜です。それらは、新潟市内で開催された「戦争展」へ出品・展示しました。

『石山村報』との出会い

図書館で読んだ『総力戦体制の正体』（小

林啓治著 柏書房）の記述の中に『石山村報』（以後『村報』と略す）が紹介されていました。終戦後、当時の政府や地方自治体では戦争責任を免れるために戦争推進に關する証拠資料を破棄する行動にでました。そんな風潮の中で、全国的にもめざらしく『村報』が残っているとのことでした。たまたま私が住んでいる地域の資料だったので、実物を読んでみようと考えました。

さつそく、石山地区公民館の図書館で探しました。閉架の本の中に、『村報』の復刻版（『石山村報 上』『石山村報 下』新潟市合併町村の歴史基礎資料集1・2）がありました。中蒲原郡石山村は1901年（明治34）に、石山、木戸、山潟の3村が合併して誕生しました。1940年（昭和15）の人口約9千人、世帯数約千三百の農村地帯です。この村では1923年（大正12）から、新潟に合併する1943年までの21年間、『村報』が定期的に発行されました。概ね月1回、239号まで発行されました。また、それらが、ほぼ完



全に保存されています(第226号のみ欠)

村役場は、兵事事務を担った

この21年間、村長を務めていたのは、長潟地区出身の小沢栄一さんでした。村政に関する出来事や計画を分野ごとに記述し広報しました。その一つに「兵事欄」がありました。

それによると、当時村役場では職員が分担して、兵士となる人員の選別と確保(徴兵検査)、確保した人員の管理と訓練(平時召集・簡閲点呼)、戦時動員(兵士の動員、物資の徴発)、徴兵制を持続的に機能させるための諸方策(恩給、叙位叙勲、軍事救護)、在郷軍人会の事務仕事や、国防献金募集実務を担当しました。これらの業務を実施するために、都道府県の兵事課や連隊司令部、警察などと連携・協力し合っていたことが分かります。

国民精神総動員運動の様子を克明に記録

発行されていた期間は、世界恐慌、小作争議戦時体制の構築、戦争拡大の時期でした。

村役場は、戦時体制の末端組織として、国の戦時計画の広報・実施を村民に働きかけました。

1937(昭和12)年8月、政府は「国民精神総動員実施計画要綱」を決め、運動を推進しました。石山村でも「時局協議会」が設置され、推進しました。11月には推進強化のため「国民精神作興週間」が設定されました。趣旨徹底日(詔書拝読式)、質実剛健日(兵隊の労苦を偲び粗食する)、生活反省日(無駄・華美・輸入品の購入を無くすため)、勤労報告日(国力増進のため1時間以上精励)、勤儉貯蓄日(貯蓄、国債応募)、奉仕日(出動兵、遺族家庭慰問、家事補助、神社清掃、道路修理)、出動将兵慰問日(慰問文・慰問品の贈呈)それらの様子についても、記事になっています。

女性・老人・子どもたちの

「銃後の護り」

強い将兵を出動させる家庭、食糧増産、軍需生産にとって有力な資金源となるのは貯蓄・

にいがた

北から南から



国防献金・国債購入を担ったのは、女性・老人・子どもたちでした。婦人団体、常会、学校での慰問文作成の様子がよく分かりました。

地域を散策

『村報』にあった入営名簿には、兵士出身字名が記載されています。その地域には、寺院があり、信仰の拠り所となっています。姥ヶ山地区には「即往寺」、石山地区には「照大寺」、紫竹地区には「順端寺」、中山地区には「楽運寺」、山木戸地区には「常明寺」があります。それらを巡りました。境内には戦死者の墓が数多くあります。先端が四角錐の形状の墓がほとんどで、容易に見付けることが出来ます。墓碑銘に記載されている戦地のご苦労を偲びつつ、冥福を祈りました。

今後とも、「平和のための戦争展」運動に関わりたいと思います。

（こひがし よしお・新潟市）

「お楽しみは
これからだ」つたか

小野塚 恒 男

「にいがた北から南から」に書くのは二回目である。今回は現役最後の年で、題は「お楽しみはこれからだ」にした。退職後には楽しいことが待っているにちがいない（待っていてほしい）という願望をこめて、教員生活をふり返った。

今回は、「お楽しみはこれからだ」が本当だったのか、退職後の生活をふり返ってみたい。

一 新しい出会いがあった。

退職後まもなく、「にいがた県民教育研究所」の一員になった。新しく知り合いになった方々や公立高教組の先輩方に教わりながら、